

## 六、アメリカの機械速記の始まり

機械速記の開発研究は早くからフランス、イタリア、ドイツ、イギリスなどで行われた。一八三七年、アイザック・ピットマンが、世界的に絶対的な地位を確立した、ピットマン式を発表したイギリスに先立つこと四年前の一八三四年、ドイツではフランツ・クサフェア・ガベルスベルガーがユーラシア大陸に影響を与えた草書派のガベルスベルガー式を発表していた。これらイギリス、ドイツの手書き速記王国では長い間、機械速記は地位を築くことができなかった。

そんな中で、手書き速記と機械速記が共存関係を持つことができたのは、古代速記の誕生地であるイタリアと近代科学文明の担い手、フランスで、それにアメリカ、オランダが続いた。フランスでは、一九一〇年グランジャン Granjean の方式が登場するまで、多くの研究が行われた。機械速記の開発が早く進んだイタリアの研究者たちは、英語とフランス語では必ずしも発音どおりにつづりが行われていないことが機械速記理論を設計する上で難しい理由だと述べてきた。

イギリスで機械速記への試みが行われた例として、ナバルはジョン・プラット John Pratt のフテロタイプ Pteotype (一八六六) や、サンガー Davis J. Sanger の名前を挙げている。



今日、定説によれば、アメリカで初めての機械速記は、一八七七年、マイルズ・M・バーソロミュー Miles M. Bartholomew (写真) が特許を取得して製作した速記機械「ステノグラフ」Stenograph だとされる。それに対してナバルは、一八六四年七月三十日に、セントルイスのカーパーンター Willbur M. Carpenter の名を挙げている。バーソロミューは一八七九年と一八八四年に特許を取得し、発明を事業化するためにイリノイ州にステノグラフ社 The United States Stenograph Corporation of East St. Louis を設立した。

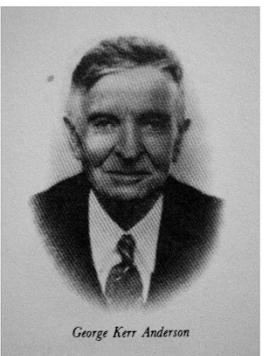


彼の速記機械 (写真) には九つのキーがレイアウトされ、全部のキーを一度に押すことができた。キーのうち四つは左右対称に配置されており、一つが親指の受け持ちで左右キーの中心部に置かれている。記録される速記記号は〇・五インチ幅の用紙にキーごとに決まった位置に短線のような穴をあけるといふものであった。左小指の受け持ちキーは「S」、薬指は「T」、中指は「R」、薬指は「N」などとなっていて、右手の受け持ちキーも同じであった。熟達すると、入力速度は一五〇WPM (一分間当たり語数) に到達する性能で、一九三七年まで実際に使用されていた。

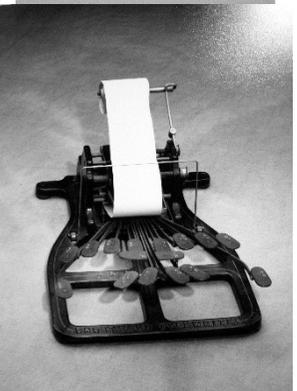
バーソロミューはイリノイ州のベルビル出身で、もともと手書きの公式法廷速記者だった。彼は自分のステノグラフ社で「バーソロミューステノグラフ」の商標の速記機械を製作して販売するとともに、幾つかの学校で技能教育を行ったが、結局それらは経営的に成功しなかった。一八八二年、この年日本語の速記が成立したが、印字部分をバーソロミューはタイプバーとインクリボンを組み込んで印字する針に交換した。これによって、巻き取り型の細幅テープ状の用紙に打ち出されるダッシュ（短線）になった。ともあれ、一八八三年、希望に満ちた彼は次のように書いている。

『機械速記に対する古い偏見が消え去り、機械速記がペン速記よりも優れているという認識を得て一般大衆の支持の波が急速に将来に向かって前進している』

次に特筆されるのは、アンダーソン George Kerr Anderson（写真）である。彼は最初タイプライターの改良を試みたが、結局一字一打の概念を最初の企てに適用することをあきらめた。速記機械が通常のタイプライターと異なる点は、「単語を一打で打てる」ところにあるが、彼が英語でその原理を確立したのは、一八八六年であった。また音声を記号ではなく、普通の文字で書くとともに、一打で音を書くように設計した。この概念は、のちのエアランドの機械に強い影響を与えた。



George Kerr Anderson



アンダーソンの速記機械（写真）のキーボードは一八九七年に特許が与えられ、初期の速記機械の外見と類似している。速記機械のキーボードは、左手側には八つのキーがあり、同様のキーが右側にも配置されている。それらのキーの中で六つは指が離れたとき、印字用のバーを動かす。残りの二つのキーはシフトキーであった。ちなみに親指が受け持つキーは四つあった。アンダーソンの速記機械は、アメリカ合衆国にハワイを併合した第二五代マッキンリー大統領の就任演説を報告するために用いられたことで知られている。その速記機械は、普通の文字を用いて高速に演説を記録することをを行うのに十分であり、打たれたものは事前に予備知識がなくても、だれでも読めるものであった。彼は事業化に努力したが、実りをもたらすことはなかった。

アメリカの機械速記の開発は一八六八年から一九四〇年代末までに四六名の発明家が特許を出願し、非常に盛んであった。一方、アメリカの機械速記からは第二次世界大戦後、ロシア語の「CTM2」などが派生した。



アメリカにおける機械速記は、ワード・ストーン・アイアランド Ward Stone Ireland (写真) によって完成された。ここでは、それまでの手書き速記全盛時代を一気に機械速記時代へ書き換える革新をもたらしたことを特筆しなければならない。アイアランドは、年一回開かれる N S R A (米国速記者協会) スピードコンテストへ、猛特訓した十代の速記実務未経験の選手たちを送り込んだ。一九一四年八月二十六日、九名の選手が三つのクラスで大活躍した。ニ〇〇 W P M (一分間当たりの語数) クラスでファニー・シヨーンフェルト Fanny Schoenfeld が正確度九九・三〇%、またニ〇 W P M クラスでクレム・ボーリング Clem Bolling が同九七・三七%でそれぞれ一位を獲得し、二八〇 W P M クラスでは、ピットマン式の老練ネーサン・バーリン Nathan Berlin が同九七・三七%で優勝したのに続いて二位にファニー・シヨーンフェルトが正確度九五・三七%で入った。アイアランドが市場投入した一九一二年から二年後、いわばひよこの若者たちに大ベテランが完膚なきまでに打ちのめされた事件であった。アメリカでは第一次世界大戦を切れ目に、速記のイノベーションが進行した。

アイアランドは一八八三年、ニュージャージー州アトランティック市で生まれた。子どもころ、勉強が終わって夜間に彼は手書き速記を練習した。一五歳の年、彼はウエスターン・メリーランド・カレッジへ入学し、最も期待される生徒の一人として学業に励んだ。そのかわら、彼は学生たちや先生のためにタイプライティングと速記の奉仕を続けた。ある夕方、文字あるいは単語でさえ、たった一打で印字するようになってつもない可能性を持つ機械はできないかという疑問が湧いた。このアイデアは彼をとりにし、時間があるとそのようなシステムの思いにふけた。

一人前の速記者に育ったアイアランドは、テキサスで法廷速記者の職を得ることになった。勉強熱心な彼は法律を勉強し、しばらくして彼はパナマ運河コミッションの公式速記者に任命された。その雇用契約期間を終えてアメリカへ帰国するとき、彼はダラスのカダヒイ梱包会社に縁ができて、南西地区担当の職を得た。アイアランドは依然速記機械に対する情熱を持っていたので、パナマから帰国する船の中でじっくり考え込んだ。彼は十代のころに行ったスクーリング時の少年、ティア Walter Fred Tear を採用したが、ティアはアイアランドのキーボード案の実験に鋭く関心を示した。速記機械(ステノタイプ)の第一号機が巢立つまで、ティアは初めてで、かつ唯一の速記機械の訓練を受けた人物であった。九年後、アイアランドは最終的な目標に達し、一九一〇年特許を出願した。

意を強くしたアイアランドは、カダヒイ梱包会社の地区マネージャの R・M・ボウエンとパートナーシップを組んだ。「オールド・アイアンサイド」(がんばり屋さんII写真)と呼ばれる第一号機の速記機械は九か月がかりで製作し、それは四十五ポンド(約二〇キログラム)もする重いものであった。第二号機は七か月で製作され、重量は十一・五ポンドと四分の一近くに軽くなった。



アイアランドはパートナーと、投資家捜しと機械速記のデモンストラーションのために精力的に動き回った。生まれたばかりの会社は一九一一年、ケンタッキー州オーウエンズボローへ移転し、そこで重さ八・二五ポンドの第四号機が誕生した。約三十人の機械速記の教師のクラスが工場で機械速記の原理について講習を受けたが、最初の速記機械が出荷されるのは一九一二年八月を過ぎていた。量産に移ると、最初の三か月間で三、〇〇〇台近い機械が製造販売された。(写真は、創業時代のアイアランドの組み立て工場)



さきに紹介した NSRA (全国速記者協会) のスピードコンテストへの参加は、そのころアイアランドの会社であるユニバーサル・ステノタイプ・カンパニーの経営幹部が思いついた。その青年たちの訓練を担当する教師は、のちに文字式速記「スピードライティング」を創案したデアボーン嬢 Emma B. Dearborn であった。アメリカでは手書き速記者が機械速記を創案し、そして教育に当たったことになる。会社は一九一三年社名変更し、ステノタイプ・カンパニー The Stenotype company となり、インディアナ州モリスヒルに新工場が建設された。新天地でデアボーン嬢が訓練した第一期生は、ヘッド Marvelle Head、シモンフェルド Fanny Shoefeld、ボーリング Clem Bowling の三名であった。続いて六名の選手が追加されたが、その顔ぶれはソーンブレイド、ホーン、リンシード、スウィーニー、コスグロウブとバムバックであった。

機械速記の若い選手たちが上位入選した事実は、ベテラン手書き速記者にショックを与えた。手書き速記者は競技が不正だと考え、コンテストは第一次世界大戦の戦時体制下で中断、一九二〇年代前半まで行われなかった。ようやく NSRA が機械速記者へスピードコンテストを門戸開放したのは一九五二年になってからだった。

アメリカの速記界は、機械速記時代へ大きく舵が取られた。機械速記の学校が林立し、ステノタイプ・カンパニーは完成品だけでなく、ボルトやナットなど部品まで増産した。勢いに乗って一般紙までに大々的に広告宣伝が繰り広げられた。速記における第一期のイノベ

ーションであった。

第一次世界大戦中、ステノタイプ・カンパニーはロシア軍向けの軍需品分野にも進出した。しかし、ロシア革命が起こって専制国家が終焉したあと、同社との契約は不履行となり、経営破綻へとつながっていった。

経営権を手放したアイアランドは機械速記への望みを捨て切れず、セントルイスへ移動してナショナル・シヨートハンド・マシンのカンパニーを設立した。彼は追加の特許を取得し、新会社へ投入した。新会社はさまざまな改良機能を加えたが、すべてがうまく運ばず、二年で挫折した。発明家アイアランドは静かに速記界から消えていき、一九五六年五月五日、ニュージャージー州ニューアークで死去した。

## 七、ステノグラフ社の登場

アイアランドの速記機械のキーボード配列を継承して登場したのが、ラサールの速記機械であった。ラサール・エクステンション大学では一九二七年、アイアランドのステノタイプ・カンパニーから権利を買い取って、マスターモデル4と呼ばれるアイアランドが製作した速記機械を用いて速記者の養成を始めた。その速記機械は一九三九年まで製造された。インクリボンが回転式で、軽量堅牢が売り物だった。

この会社には、ミルトン・ライト M. H. Wright の指揮下、一九一四年の NSRA 競技で活躍した選手たちが雇用されていた。だが、一九二九年のニューヨーク証券取引所が発火点となった世界大恐慌は同社の業容を縮小させ、法廷速記業の活動は一九三〇年代まで蝸牛の歩みのようにのろかった。速記学校は閉鎖され、速記教師は失業した。新品の速記機械は売れなくて中古機械に食われて速記機械の生産は縮小し、業界は垂直に落下したような不振ぶりだった。

ラサールでは、プライス E. S. Price が最初の在宅学習コースを開発し、カリキュラムに書き取り練習が加えられた。これが、ラサール・ステノタイプ・インスティテュートが発となって、全国に普及する教育事業となった。ミルトン・ライトとプライスは協力関係を築いて速記機械の改良や教材開発などで改善を重ねたが、ラサールは資金不足から意欲的にはならなかった。

ラサールの社長補佐を初め、経営の舵取りを行ってきたミルトン・ライトは、ラサールを退職し、翌一九三八年改良機種の製造販売を行う自分の会社に「ステノグラフ」(以下ステノグラフ社と呼ぶ) Stenograph と命名した。社名はバーソロミューが開発したアメリカで最初の実用的速記機械にちなんだものであった。ミルトンは子息、ロバート・ライトと力を合わせて経営に当たり、支援者を確保すると同時に、機械の改良に乗り出した。その課題は(一)軽量化、(二)操作音の静音化、(三)やわらかく、たやすい打鍵で明瞭にしっかりとした印字、(四)インクリボンの自動回転、(五)インクリボンの長寿命化、(六)静かで、機能的かつ信頼性のある伝導機構とされた。ロバートは六機種を手づくりで製作した。そし

て機械速記を教育している町を巡回し、二、五〇〇台の受注を獲得する大成果を挙げた。再び起こった第二次世界大戦では、ステノグラフ社は部品、資材と学習者不足に追い込まれた。しかし、終戦後は速記学校に再び学生があふれ、速記機械の販売ブームを巻き起こした。

#### 八、アメリカ機械速記の技術発展

ステノグラフ社を含めて、アメリカの新しい発想に基づく新機種を見よう。一九四〇年にはブレビタイプ Brevi-type (写真) がカーク・パトリック Wendell V. Kirkpatrick によって開発された。これはABC速記法の機械版だった。そのキーボードは通常のタイプライターをベースにしていたため言葉を発音で表し、略語を用いるものの、そのキー配列のゆえに符号化の機能は取り除かれていた。速記機械は一九四七年にサンディエゴで初めて発売され、二年後に販売地域を拡大した。



このほかにも多くの発明家が速記機械の開発に取り組んできた。アメリカの機械速記は、バーソロミューの発明を出発点に、アイランドによってイノベーションを実現し、裁判記録市場のニーズに応じたステノグラフ社によって持続的な成長へ進んだ。しかし、イノベーションは機械速記自体を対象に激しく進んでもいる。

アメリカにおける機械速記の技術史を追うと、金属精密加工機械技術の形成期から成長期の流れの中で、機械機構の発明期、そして電子制御技術の成長、機械機構の電子回路代替、ワードプロセシング技術の登場、音声認識技術の実用化といったキーワードで成長の過程を見ることができるといえる。

速記機械開発のリード役を担ってきたステノグラフ社の主要機種を中心にアメリカの速記界の変遷を見たい。前史として一九一一年の「オールド・アイアンサイド」第一号機は、現在の機種にはないが、キーボード表面にキーの文字が書かれていた。頑丈につくられていたため非常に重く、テレビで見かけるように、連邦議会議場でキャンバス上に載せて首からつり下げて立ち歩きしながら入力するような使い方はできなかったが、その後軽量化が図られて一・二五ポンド(約五キロ)へと改良されていった。

この速記機械の入力は、通常のタイプライターがキーを押したときに入力完了するのに対して、複数のキーを同時に入力するのを確実にするため押すべきキーがすべて押され指が離れるときに入力されるという仕組みの構造をとっており、これも、通常のタイプライターと異なる特徴である。

速記者は一樣に速記スピードの速さと完成した速記録の正確さを競うが、フリーランスの実務の世界では長時間作業に耐える装備が非常に重要である。長時間連続作業して打てる速記機械として、ステノタイプ・カンパニーが不振期の一九一七、一八年に特許を出したインクリボンの折り返し機構がマスターモデルに組み込まれた。このメカニズムによって、長時間でもインク切れの恐れがなくなった。これらの新機能は、一九二七年にラサール・エクステンション大学へ権利が売却されるまで眠っていた。

ステノタイプ・カンパニーの次にアイアランドの設立したナショナル・ショートハンド・マシン・カンパニーが独自のキーボードで出した「マスターモデル」と呼ばれる一九一八年の機種、一九一九年の用紙の剪断ナイフ付き機種、一九二〇年のマルチソフトバーの機種（速記符号を省いた機種）は製作が複雑で成果を収めることができなかった。



消耗品などを販売していたステノグラフ社は一九三九年、バースロミューの「ステノグラフ」のブランドをつけた最初の機種「セクレタリアル・モデル」を発売した。この機種にインクリボンテープがエンドレスで回る仕組みが組み込まれ、速記用紙の収容量も大きく設計されて、紙送りが静音化された。また外殻シェルにマグネシウム合金が採用されるなど、丈夫で軽くする改善が取り入れられていた。今日でもパソコンの外殻にマグネシウム合金を採用している機種は高級機に限定されるが、このような一連の材料開発は創業者の息子、ロバート・ライトがノースフィールドのカールトンカレッジで物理学の学位をとり、最新材料の分野に理解的であったことによるものである。ロバートはアイアランドの機械の課題を分析して新たに六件の特許を取得し、一九三三年にアイアランドの特許の期限が切れて技術が使えるようになると、名実ともにアメリカの機械速記のリーディング・カンパニーとしての地位を固めていくことになる。

ラサール・エクステンション大学でも一九四〇年代後半まで速記機械の改良を続けた。速記時間が長くなると、用紙とインク切れを起こさないことが求められ、既存の特許に抵触しないで、かつ性能よく、低コストで製作できる技術開発が課題であった。ラサールもリボンの反転メカニズムを考案した。ラサールは速記機械の製造をステノグラフ社に依存しており、同社はさらにシカゴのヘッドマン・カンパニーへ生産委託していたが、一九四八年、生産品質の向上と将来の開発、試験を強化するため自社工場へ変更した。ちなみに、一九六〇年代、ヘッドマン・カンパニーは、「ステノプリント」ブランドで速記機械を開発した。

ステノグラフ社の社長だったミルトン・ライトは一九五六年に死去したが、経営権は子息のロバートに継承され、シカゴのスコキーへ新鋭生産拠点を構築し、積極的な市場戦略を展開した。ロバートは一九八二年には外殻シェルにプラスチックを初めて採用し、カラー化を実現した。ステノグラフ社は五〇周年を記念して集大成となる「五〇周年法廷速記者モデル」を発売し、以後数十年間使用されてきた。ステノグラフ社の技術力は速記機械分野で最高水



速記符号をカセットテープに書き込むステノタイプ（クラーク速記事務所で撮影）

準にあり、とりわけ印字メカニズムの中で使用されるスプリングは羽毛のように柔らかく、速記者一人一人の好みに応じて微調整できる点で他の追隨を許さないものであった。

速記機械は究極の機械技術を駆使して完成された書字機械であったが、電子技術の導入が始まる。同社は、一九六三年、速記符号を磁気テープに書き込む電子回路を速記機械に取り付けることに成功していたが、ケーブル接続から、一九七〇年にはカートリッジが採用され、一九七四年にはカセットテープ（写真）に変わった。打鍵キーの電気的な信頼性を高めるために新しいスイッチも開発した。

一九八七年の「スマートライター」は、速記符号をフロッピーディスクに書き込めるようになり、MS-DOS（マイクロソフトのオペレーティング・システム）上で速記符号が自動的に反訳され、しかもリアルタイムで実行できるものであった。同機は一九九二年に「ステンチュラ」が登場するまで、電子機械速記の代表選手であった。ステンチュラはリアルタイムの電子自動反訳を前提として開発された最初の機種だった。機械メカニズムは以前の資産を継承しており、速記符号や反訳文を表示する液晶表示装置が取り付けられ、紙テープ上に速記符号を印字する機能を残していた。二〇〇四年まで生産され、世界で五万台以上が販売された。

ここで同社の主要な出来事を挙げると、第二創業者のロバートは一九七八年、同社をキホーテへ売却したが副社長にとどまり、その後も二〇〇〇年一〇月二日に死去するまで、相談役、顧問、相談相手などで最期まで同社に関係した。また同社は一九九六年、ハイコ企業グループに買収され、新しい時代を拓くため生産拠点をスコキーからマウント・プロスペクトへ新設移転した。新分野開拓のため、二〇〇〇年十一月、教育事業への進出を決定し、ステノグラフ・ユニバーシティオンラインのネット教育を二〇〇一年五月から始めた。

二〇〇一年に登場したのは印字機構を除いた電子速記デバイスの「エラン・サイブラ」であった。CART（コミュニケーション・アクセス・リアルタイム・トランスレーション）、つまり聴覚障害者等への文字による同時通訳用に、発言と同時に文章で伝達するために開発された機種であった。テレビ字幕、キャプション、テープ起こしを主な用途として設計され、二〇〇六年には無線でデータを転送する機能が強化された。ここに至り、機械技術をベースに開発されてきた速記機械は電子装置へと変身したことになる。二〇〇三年には「エ

ラン・ミラ」が登場、二〇〇五年の「エラン・ミラA3」は発言の音声データと同期する機能を追加されており、登場と同時に法廷速記の標準機となった。コンピュータとの接続関係は、リアルタイム筆記のためパソコンに接続するUSB（ユニバーサル・シリアル・バス）ポートのほか、高速通信が可能な無線Bluetoothウース機能も備えたものとなった。

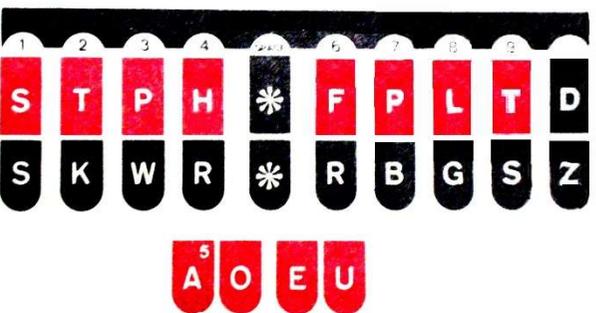
名機「ステンチュラ」の後継機種となる「ステンチュラ・ヒュージョン」は二〇〇五年に登場し、速記原本作成機能を引き続き装備しながら、外部記憶デバイスのSDカードメモリのスロットが設けられて、入力した速記符号等のデータをオーディオ同期させながらライブで書き込める機能が加えられた。二〇〇九年七月、キーボード微調整を必要としない高い完成度の機種、ディアマンテを市場へ送った。さらに二〇一〇年七月、ディアマンテと同じ外観のウエーブRを学生と字幕速記者向けに発売した。

#### 九、アメリカの機械速記のアルファベットと打ち方

ここで、英語の機械速記法の入力方法の例として、ステノグラフ社の理論のポイントを紹介する。前提となるキー配列は、同社の「新機械速記」教本に掲載されているものを示す。

入力は原則として発音で入力する。キーにある文字はそれを使用する。単語の入力は、左から右へ打ち進んでいくことが原則で、音を最後まで打つために一語の入カストローク数が一打以上になることもある。キーボードにない文字は、組み合わせによって表す。

キーボードで親指が受け持つ一番手前の四つのキーは、母音を担当している。左手は親指を除いて四本の指で受け持ちのキーがすべて決められている。



ステノグラフ製速記機械の英文アルファベットキー配列

単語の頭音、前音に出現する音が盤面で打てる場合はそれぞれを使用するが、盤面にない文字の「B」は「PW」を同時に押し表す。「C」は「KR」、「CH」は「KH」、「D」は「TK」、「F」は「TP」、「G」は「GR」、「H」は「RH」、「I」は「RH」、「J」は「TKPW」、「L」は「SKWR」、「M」は「PH」、「N」は「TPH」、「O」は「K」、「P」は「V」、「Q」は「W」、「R」は「KWR」、「S」は「K」、「T」は「P」と打つ。母音の「I」は右手の親指で「EU」を同時に押し打つ。長音「A」は「AEU」、長音「I」は「AOEU」、長音「U」は「AOUU」、長音「E」は「AOE」、長音「O」は「OEE」、「OO」は「AO」と打ち、例えば「COOL」、「BOOK」、「DOOR」、「FLOOD」などに用いる。「AU」、「AW」は「AU」と打ち、例えば「TAUGHT」などに用いる。「OOI」は「OEU」と打ち、例えば「TOY」などに適用する。左から右へ打ち進んで一打で打ち終えること

ができない場合、二打目以降で左手のキーを再び用いる。

右手でも、左手と同じように、盤面のない文字は組み合わせて入力するが、原則として二音目以降の文字に用いられる。「CH」は左手と違って「FP」と打ち、SUCHのような語に使う。「J」は「PB」G、「K」は「BG」、「M」は「P」、「N」は「PB」、「V」は「F」、「X」は「BGS」と打つ。文字のほかにはピリオド「.」は右手で「FP」L「.」、カンマ「,」は「RBGS」、疑問符「?」は左手で「STPH」と打つようになっていいる。アルファベットの「C」は英語の場合、発音により「CAR」（クルマ）の場合は「K」を用い、「CEILING」（天井）の場合は「S」で打たれる。このほか、接頭語、接尾語などの速記記号が設定されている。

初心者の導入教育ではわかりやすさに力を注いでいる。「SAT」（すわる）は左手の小指で「S」、左手の親指でA、右手の薬指で「T」をそれぞれ打ち、普通のスペルから思いつくように説明されている。ただ、発音どおりに書いていく原理から、動詞の「TELL」（話す）は「TE」、「ILL」（病気）は「I」と打つように指導される。発音しない黙字は、「TAUGHT」（教えた）を「TAUT」とするようになり、打たない。あわせて速度を稼ぐために、略語をたくさん用意している。例えば「SATURDAY」（土曜日）は「SAT」とされ、「REMEMBER」（思い出す）は「RER」と打つ。それらのキーはバラバラに押さえても、指を離すときに入力の実行されるようになっていいる。正書法では書かれる文字で発音されない黙字は書かれないが、発音される音でも「OTHER」（ほかの）のような「TH」としたり、T尾音は「COST」の場合「KOS」とされるように「T」を書かないなど、速く入力するためにつづり方の省力化が図られている。速記文法には、ほかに接頭辞、接尾辞などが整えられており、さらに打鍵数を減少させるために多くの略語が設けられている。

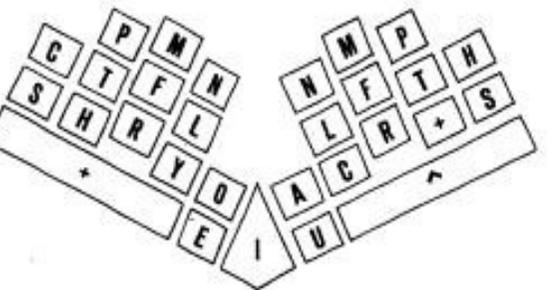
十、イギリスの機械速記のアルファベットと打ち方

英語の速記機械の考案はアメリカで最初の特許がとられた同じころに始まったとされるが、イギリスにおける代表的な速記機械にパラタイプ Palantype がある。第一次世界大戦と第二次世界大戦の間ごろに、フランス人女性教師で心理学者のパランク Palanque がフランスのグランジャン式を参考にして開発した。主にラテン文字を用い、初期のころには二つの追加記号が付加されていた。その特徴は、学びやすく、読み返しが容易な点にあった。音素や文字単位ではなくて、入力の問題は音節単位である。キーボード(図)は人間工学的に配置され、二九のキーを備えている。

キーの配列は、左小指から順に、

SC(K)K(P)TH(D)+MFRNLYOEAIU>NLCMFRPT+(D)SH

と並んでいる。英語の音素は四〇以上あり、パラタイプPのキーボードはすべての音素を備えていない。「D」の文字は「+T」を同時に押す。これは、「+」のキーを同時に押すと、音素が有声音を示すという原則に基づく。一つの母音文字は短い母音を表す。アステリスクを同時に押すと、その母音が長母音であることを示す約束になっており、キーボードでは「>」を押す。子音の「C」は「CAT」(キャット)のように硬音を表し、「CELL」



(「セル」のように軟音は「S」を必ず使用する。「N+」は「NG」を表し、「+F」は「>」を表す。「MF」は語頭の「w」を表し、「F+」は語尾の「w」を表す。さらに二重母音の「OU」は「MOOT」(人民集会)、「ムート」や「BRUTE」(けだもの)、「ブルート」の「ウ」、「OE」は「SOUL」(魂)、「ソウル」。「MOTTE」(ほりり)、「モウ」の「オウ」、「O」は「SOI」(土)、「ソイル」。「TOY」(おもちゃ)、「トイ」の「オイ」、「AI」は「MIGHT」(MAYの過去形)、「マイ」。「HEIGH」(高さ)、「ハイト」の「マイ」、「AU」は「HOUSE」(家)、「ハウス」。「NOW」(今)、「ナウ」の「アウ」を表す。文字の「Y」は「j」、「y」を表し、頭音の子音または単語中の母音を示す。

基本でこのように打っていくかを例で見よう。

#### 【英語文】

This demonstration shows a prototype aid for the deaf which has been designed and built at Southampton University.

#### 【入力の単位】

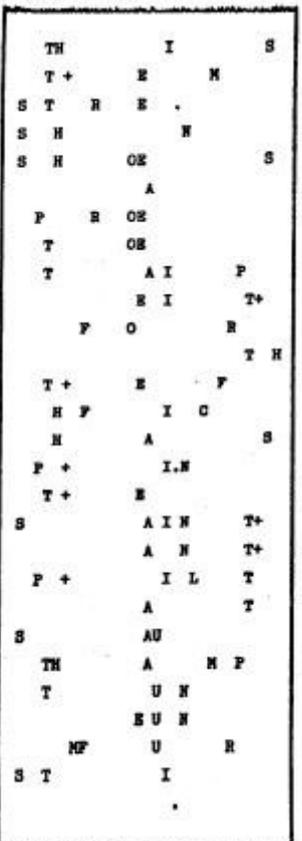
This dem(on)-stra-tion shows a pro-to-type aid for the deaf which has been de-

signed and built at Southamp-ton Un-iver-sity.

【入力速記符号】

THIS T+EM STRE. SHN SHOES A PROE TOE TAIP EIT+ FOR TH T+EF HFIC HAS P+I, N T+E  
SAINT+ ANI+ P+ILIT AT SAU THAMP TUN EUN MFUR STI .

This  
deaf(ca)-  
-stra-  
-tion  
shows  
a  
pro-  
-to-  
-type  
aid  
for  
the  
deaf  
which  
has  
been  
de-  
-signed  
and  
built  
at  
Sou-  
-thamp-  
-ton  
Un-  
-iver-  
-sity



例文は、原則として音節一つつつ打たれている。「デモンストレーション」は、「デモ(オ  
ン略)／＋」／ストレイ／＋「シヨン」／とミストロークで打たれ、「プロトタイプ」  
と「サウザンプトン」、「ユニバーシティ」も、ミストロークでつづりどおりに打たれている。  
また、つづりの中で、弱いアクセントの母音は省かれる、ある種の接尾辞の母音は省かれ  
る、二重子音は略されるという原則が設けられている。